広告　企画・制作 読売新聞社広告局

海外プロジェクト 探検隊
～世界の仕事現場を見に行こう!～

第12回 インドネシア＆東北

後列左から
渡邉 啓介(わたなべ けいすけ)さん　東京都立日比谷高等学校2年
田邉 雄斗(たなべ ゆうと)さん　桐蔭学園中等教育学校5年(高校2年)
太田 直希(おおた なおき)さん　宮城県仙台第二高等学校2年

前列左から
酒井 恵理香(さかい えりか)さん　渋谷教育学園渋谷高等学校2年
佐藤 千夏(さとう ちなつ)さん　宮城県気仙沼高等学校2年
川内 彩可(かわうち あやか)さん　東京都立戸山高等学校2年

復興と発展に思い寄せ 国内外を高校生が取材

三菱トラック 一番人気
インドネシアのニーズに合致

三菱商事が海外で展開するプロジェクトを高校生が訪問・取材してリポートする「海外プロジェクト探検隊」。第12回の今回は7月から8月にかけて東日本大震災の被災地とインドネシア・ジャカルタのプロジェクト現場を巡る二つの特別ツアーが組まれた。参加した1都2県の高校生6人は、国内の被災地では津波被害の爪痕が生々しい沿岸部などを視察して復興と地方創生にかける人々の心意気に胸を熱くし、ジャカルタでは国家発展の基盤を支える自動車産業を見学してインドネシアの将来に思いをはせた。

インドネシアの首都ジャカルタ郊外のスカルノハッタ空港から中心部へと向かうバスに乗り込んだ高校生たちは早速、「ジャカルタ名物」の大渋滞に見舞われた。歩道に目をやれば、木陰のベンチに寝ころんでのんびりと昼寝する人や、ガソリンを詰めた廃品のペットボトルを売っている。全員が初めての訪問となったジャカルタは何もかもが新鮮だ。

最初の取材先となった三菱商事ジャカルタ事務所では、伊勢田純一・インドネシア総代表、梅村卓生事務所長らが出迎えてくれた。高校生たちは「インドネシアの平均年齢は30歳くらい。そのエネルギーに触れて、日本を見直すきっかけにして下さい」と、伊勢田総代表から励ましを受け、「暑くて熱いジャカルタ・ツアー」はスタートした。

伊勢田総代表

部品製造、車両組み立て、販売、自動車販売金融と、自動車事業の川上から川下まで幅広く展開する三菱商事のバリューチェーン(用語)を体験すべく、郊外にある三菱商事の関連会社「KRM社」の工場を訪れた。1973年に設立され、三菱自動車や三菱ふそうトラック・バスの現地生産を担う。

KRM社で組み立てられる三菱ふそうのトラックはインドネシアでは一番人気。ジャカルタ周辺で使用されているトラックの半分程度は三菱ふそうのものと言われる。なぜか。実は戦後、海外で初めて自動車工場を作った日本企業は三菱商事だ。60年代にタイで、そして次がインドネシアだった。「安くて頑丈な車を」との顧客ニーズに合った生産にこだわり、市場に深く食い込んできた。

酒井恵理香さん(渋谷教育学園渋谷高校)は「インドネシアは所得向上が見込めるし、エコ志向も高いらしい。電気自動車を作れば、高くても売れるのでは」と、感想を語った。

続いて訪れたのは「MKM社」の工場。こちらでは三菱自動車及び三菱ふそうトラック・バスの現地生産車両用の部品を製造している。場内を歩いていると、エンジン製造ラインの床に「DAISHA」の文字が。「台車」を置くスペースを示したものだという。MKM社も40年以上の歴史があるだけに、日本人とインドネシア人の職員が共有している日本語がいろいろあるようだ。

日本人職員の説明を聞きながらMKM社工場を見学。部品製造、組み立て、販売、自動車販売金融までを担う幅広い三菱商事の事業展開にびっくり

この後、三菱自動車の乗用車・軽商業車及び三菱ふそうトラック・バスのトラックの輸入・販売を担う「KTB社」へもお邪魔した。東南アジア諸国連合(ASEAN)地域の最重要市場の一つであるこの国で、トラックではシェアNo.1を支える。日本流のきめ細かなサービスと約240店舗の販売ネットワークで顧客の信頼を勝ち取っている。同社からの「インドネシアでは将来、まだまだ車が売れるのを見込んで、工場を作っていますよ」との説明に、高校生一同は驚いた様子だった。同社では社員食堂で現地職員と昼食を交えての交流会も楽しんだ。

最後の現場は車を購入する会社や人へのサポートをする自動車販売金融会社「DSF社」。吉野節也社長は、ビジネス上の注意点として「インドネシアの軒先を借りて商売をしていることを忘れてはいけない」と話した。児童養護施設などへの寄付、災害への支援など社会貢献活動に力を入れているという。

将来、商社で働きたいという渡邉啓介さん(都立日比谷高校)は「インドネシアに感謝し、また信頼やきめ細かさといった日本人の美徳を生かしながらビジネス展開していることに感銘を受けた」と話した。

KTB社の食堂で現地職員と一緒に昼食をとりながら、インドネシア語も教わった

再生支える復興支援財団
三菱商事 東日本大震災被災地で

2011年3月11日に発生した東日本大震災による津波で破壊された被災地をバスで巡った東北ツアー。高校生たちは絶望的な虚無感にさいなまれた。

宮城県名取市の閖上(ゆりあげ)地区。14人の生徒が亡くなった閖上中学の校舎の時計は地震発生時刻の「2時46分」を指したままだ。日和山という小さな山のふもとに石碑が倒れていた。1933年の「昭和三陸津波」の発生とその教訓を後世に告げるため、当時の被災者たちが建立したものだった。「この人たちの思いは語り継がれなかったのです」と、地元ガイドがもらした。

2日目は宮城県南三陸町を巡った。20対もの高台にあったのに生徒や先生、住民たちが津波にのまれた戸倉中学校や、43人が亡くなった「防災対策庁舎」を訪れ、手を合わせた。田邉雄斗さん(桐蔭学園中等教育学校)は「被災者の恐怖と悲しみを実感できた。ここに来たことのない人たちにそれを伝える使命を僕は背負わされたと思います」と表情を引き締めた。

仙台秋保醸造所のブドウ農園でボランティア

三菱商事東北支社を訪れた高校生たちは、志村孝信支社長から「東北はトレジャーランド。良さを再発見してほしい」と激励され、「三菱商事復興支援財団(用語)」や気仙沼信用金庫(菅原勇理事長)などの出資を受けて新事業に取り組む企業を回った。

絶望のふちにあっても、復興に向けて挑み続ける人たちがいることは大きな救いだ。

仙台市のワイナリー「仙台秋保醸造所」では農作業ボランティアを体験。三菱商事が派遣する社員ボランティアたちと一緒に汗を流した。

気仙沼市の「サンフレッシュ小泉農園」では、トマトの大規模水耕栽培施設を見学。同市の「海の市シャークミュージアム」では地元漁業を学んだ。岩手県陸前高田市の「復興の象徴」と称される「キャピタルホテル1000」では、再建を果たした従業員の心意気に感じ入った。

東日本大震災の津波で自宅の車が流される被害に遭った佐藤千夏さん(宮城県気仙沼高校)は「一企業がこんなに被災地を支えてくれていたなんて感激しました」と笑顔を見せた。

小泉進次郎氏を訪問

「震災と復興について識者に聞きたい」――。高校生たちは探検隊ツアー終了後、小泉進次郎・内閣府大臣政務官兼復興大臣政務官(取材時)を復興庁に訪ね、震災体験が風化していく懸念などについて聞いた。

高校生と意見交換する小泉進次郎氏

小泉政務官は「教訓をとどめようという思いを持つ人と風化させないようやっていく。1人でも多くの人に被災者と交流してもらいたい」と回答。

その上で「みなさんは被災地を訪問したのだから、次の行動を考えて。自分が、あるいは自分の街が被災した時、また、次に大きな災害が発生した時、何をするのか考えてほしい」とアドバイスした。

ジャカルタツアーでは、インドネシアのクントロ・マンクスブロト元復興庁長官にも会った。クントロ元長官は2004年のスマトラ島沖地震・津波で甚大な被害を受けたインドネシアのバンダアチェなどの復興にあたった。当時は、陣頭指揮のため妻と被災地に移り住んだ。「4年間で14万戸の家を建て、3600キロの道路を整備した。住民と対話しながら、震災前よりもいい生活環境を作り上げた」と胸を張った。太田直希さん(仙台第二高校)は「『とにかく前へ』という気持ちが成功の鍵だったようだ。日本の被災地も頑張らなければ」と話した。

高校生に語りかけるインドネシアのクントロ元復興庁長官

このほか高校生たちは国内ツアー中、気仙沼市役所に菅原茂市長を表敬訪問。同市の復興状況について、菅原市長からレクチャーを受けた。

国境超えた友情を育む
日本語ミュージカル劇団en塾を訪問

ジャカルタツアーでは、現地の大学で日本語を学ぶ学生たちで組織される日本語ミュージカル劇団「en塾」の団員たちと交流した。ボランティアとして運営に携わるKRM社の秋元国俊副社長が橋渡しをしてくれた。2009年に旗揚げされた同劇団は、日本での公演も重ねるプロレベルの実力を持つ。高校生の来訪を歓迎しようと、日本人夫妻がジャカルタ観光しながら文化に触れる様子をコミカルに描く寸劇を演じてくれた。

高校生は2週間かけて練習した五輪真弓さん作詞作曲の「心の友」を披露した。この曲は1980年代半ばにラジオで流れたのをきっかけに、日本語であるにもかかわらず、インドネシア全土で大流行となり、知らぬ人はいないと言われるくらいインドネシア人に愛されている。高校生たちが歌い始めると、劇団メンバーから大歓声が上がり、みんなで唱和した。続いて高校生側が「AKB48」のダンスを披露すると、日本の流行に敏感な劇団員たちは、一緒に歌って踊って盛り上がった。

AKB48の曲に合わせ、一緒に歌って踊って盛り上がる高校生と劇団員

川内彩可さん(都立戸山高校)は「みんな『日本が好き』と言ってくれてうれしかった。日本語で話ができるだけで、ぐっと距離感が縮まった。いろんな国の人とその国の言葉で交流したい」と声を弾ませた。

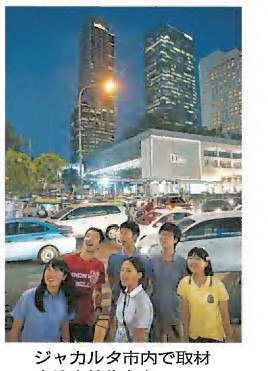
このほか、ジャカルタでは国際交流基金ジャカルタ日本文化センターへも足を運び、小川忠所長の案内で日本語書籍など2万冊を所蔵する図書館などの施設内を見学。地道に進められる日本・インドネシア両国の文化交流について理解を深めた。

海外プロジェクト探検隊とは

6～10人の高校生を「記者」として海外派遣し、現地取材で学び、体験した内容を読売新聞や読売中高生新聞、ヨミウリ・オンラインなどで発信してもらうシリーズ企画。

三菱商事が手がけるビジネス現場を訪問するほか、現地学生との国際交流や現地の社会、文化を学ぶプログラムを通じて、総合商社のビジネスや外国文化への理解を深めてもらう狙いがある。将来、国際社会で活躍する人材育成に寄与することを目指している。

12回目となった今回は、初めて国内視察も実施した。7月31日～8月2日に宮城県の仙台市、気仙沼市、南三陸町、岩手県陸前高田市などを、8月25日から29日までインドネシア・ジャカルタを訪問した。


ジャカルタ市内で取材する高校生たち

バリューチェーン　ビジネスの川上から川下までの各段階で、商品の付加価値を高めながらお客に届くまでのプロセスの連鎖を指す。あらゆるプロセスに関与することで、安定供給、高付加価値の商品製造が可能に。かつては仲介(貿易)事業が中心だったが、バリューチェーン構築で様々な経営を担い、より高い利益を目指す姿に変わった。

三菱商事復興支援財団　被災地の復興支援に継続的に取り組むため、2012年3月、三菱商事が設立。被災地の産業復興と雇用創出を目的に、地元金融機関などと協働し、支援事業に取り組む。大学生への奨学金給付や、復興支援に携わる非営利団体への助成、また福島県郡山市と連携し果樹農業6次産業化プロジェクト事業も実施している。

主催：読売新聞社　特別協賛：三菱商事　後援：気仙沼市、インドネシア共和国大使館　協力：気仙沼信用金庫